

# 01 Hogeweyk ホーヴェイ 認知症高齢者のための「村」としての住宅群

視察月日：10月1日

記録担当者：山田あすか，井上康

案内者：Ms. Yvonne van Amerongen-heijer  
(senior managing consultant, be / founder of De Hogeweyk)

## ■施設概要

所在地：Heemraadweg 1, 1382 GV Weesp, Holland

施設種別：Verpleeghuis (養護老人ホーム)，認知症高齢者のための住宅

運営主体：Vivium Zorggroep (フィフィウム・ケアグループ)

設計者：Molenaar & Bol & VanDillen

建設年次：2009年12月

敷地面積：約16,000m<sup>2</sup>

延床面積：約12,000m<sup>2</sup>

構造・階数：RC地上\*階地下\*階

建設費：計1,930万€ (オランダ政府1,780万€，地元団体等から150万€) (円換算約25億円@1€約130円，2009.12)<sup>1)</sup>

定員：home23軒 (各home定員6～7人)，計152人。  
2017年現在，4軒 (同)，計28人分を増築中。

平均入居期間：2.5～3年間 (一般的なnursery homeでは2～2.5年)

職員数：フルタイム160人，パートタイマー240人，ボランティア150人

運営費：入居者1人あたり，日常的な健康管理 (投薬含む) や人件費，居住費などの一切を合わせて介護報酬は5,000€ / 月と決まっている。この費用は，都市部であっても農村部であっても全国で一律。

## ■運営概要

オランダでは，認知症の人の人の85%は最期まで「特別な住宅 (ケア付き住宅)」を含む彼ら彼女ら自身の「自宅」で暮らしている。他方，24時間のケアが必要でありその対応が家族ではできないなどの理由でどうしても自宅で暮らすことができない，本人や周囲に対する暴力行



写真1. 周辺状況 (googlemap より)

アムステルダムから車で20分ほどの郊外に位置する。周囲には商業地域，高層住宅地，低層住宅地，大規模公園がある。幹線道路から緑道に入ってアプローチ。

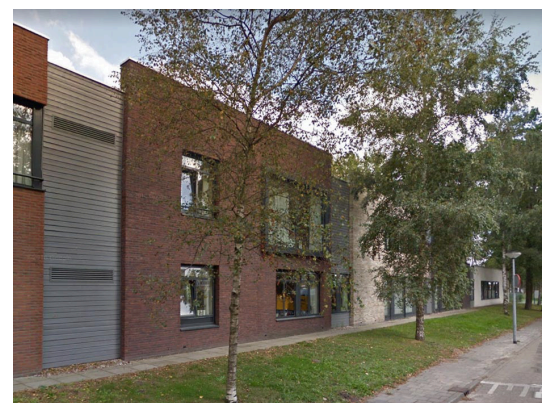


写真2. 南東 (低層住宅地) 側外観 (googlemap より)

住棟ごとに外壁が分割されており，外装も異なる素材で仕上げられている。オランダの「普通の住宅」らしい，ヒューマンスケールと意匠でデザインされている。



写真3. エントランス付近外観 (googlemap より)

エントランスブロックは1階建てで，外観はさりげない雰囲気である。

## 参考文献

1) DETAIL, TOPICS, Dementia Village 'De Hogeweyk' in Weesp, <<https://www.detail-online.com/article/dementia-village-de-hogeweyk-in-weesp-16433/>>, 参照 2017.10.05

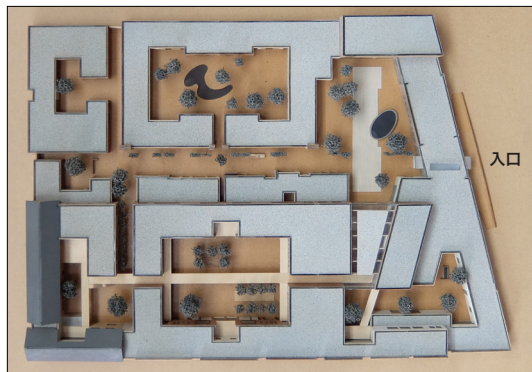


写真4. 模型/配置の様子

中庭を囲む街区型構成の1階ないし2階建て住宅群が路地を介して配置されており、オランダの都市における典型的住宅地の広さと雰囲気がつくられている。

為があり元のコミュニティでは暮らすことが困難である、などの残る15%の人々がnursing homeなどの自宅以外の場所で暮らしている。かつての、そして今でも一部のnursing homeは、生活の場ではなく広さや見た目といった形態、匂いや音、運営などその環境は病院のようであった。このHogeweykでは、「本人にとって自宅が理解でき、安心できる最適な環境」ではなくなった認知症の人にその環境を提供するべく、認知症の人のための住宅と生活の場として必要な機能を集めた「村」をつくっている。

## ■全体構成

### 1. コンセプト

このプロジェクトのコンセプトは認知症の人にとって「より高いQOL, より混乱が少ない環境」である。認知症の進行を和らげしQOLを維持・向上するため、①新鮮な空気、②運動、③自然光、がある環境を実現し、さらに最も重要な④社会的接触の機会を最大限に高めている。

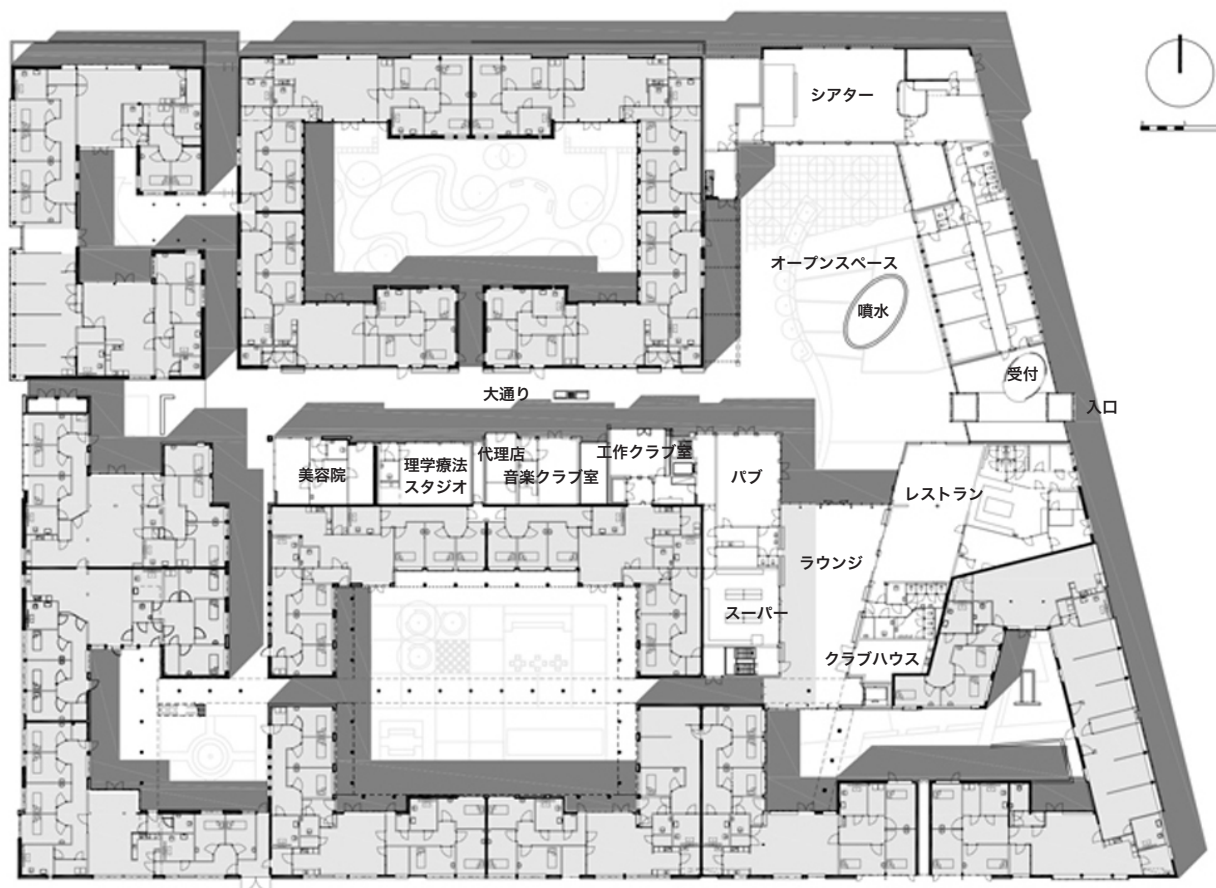


図1. 平面図 (施設 website より)

それぞれのhomeは6~7人定員で、3ないし4の個室とトイレでグループされたユニット2つとリビングから成る。各個室にトイレを設置することも検討したが当時は設置と運用の予算の関係で断念。普通の家には各寝室にトイレはないため入居者からの不満は聞かれない。しかし、訪問する家族からの強いニーズがあるため「いまだったら、個室トイレにしよう」とのこと。

## 2. 「理解できる」住まいとしての環境

物理的にも人的にも、また運営的にも複合的な意味でそれぞれの入居者が暮らしてきた住まいらしい環境であることを重視し、6～7人定員の独立したhomeによって住棟を構成し、住棟と飲食・娯楽・生活関連など公共施設によって回遊性のあるひとつの街を構成する。この街のなかで、入居者は自由に外出し、必要に応じて支援を受けながら買い物や娯楽を楽しむことができる。

例えば入居者がスーパーで支払いを忘れてもなにも問題とはならず、その分の請求は後日家族が支払う。不要なものを持ち帰った場合は職員がそっと戻しておく。2階のhome居住者は真っ直ぐな渡り廊下を通りコミュニティセンターのエレベーターに自然にたどり着く。このエレベーターは人感センサーで2階から1階へ、1階から2階へとボタン操作不要で自動運転され、入居者は上下移動にも混乱がない。入居者はhomeから外出できさえすればよく、帰路に困るなら commonspaceの各所に常駐する職員が送るか、homeの職員が迎えにくる。

このような環境のなかで、入居者らは「自分自身が理解できる」「理解不能な理由によって誰かに責められない」安心感と尊厳、自己肯定感、自己決定の機会をもって暮らせる。しばしば認知症の高齢者は外出に不安を感じて引きこもってしまうことがあるが、ここでは安心して外出できるため身体を動かす機会や社会的交流の場が入居前よりも増え、必要な薬が減る入居者も多い。

### ■特徴のある commonspaceのデザイン

敷地全体を使って6つの街区型構成の建築群がつけられている。エントランスを入ると噴水のある池が設けられたパブリックなオープンスペースと、生活施設群が商店街のように並ぶ大通りが広がっている。このオープンスペースに面してコミュニティセンター（アトリウム空間を中心にレストラン、スーパー、クラブハウス、ランドカフェ：パブが配されている）とシアターが設けられている。さらに5つの中庭を街区型住棟が囲み、住棟間には路地が設けられている。それぞれの中庭には、そこに面するhomeごとのライフスタイル（後述）に対応したデザインがなされている。こうした特徴のあるデザインが、空間の認知と記憶を助け、自分の家や街だという感覚をつくっていく。

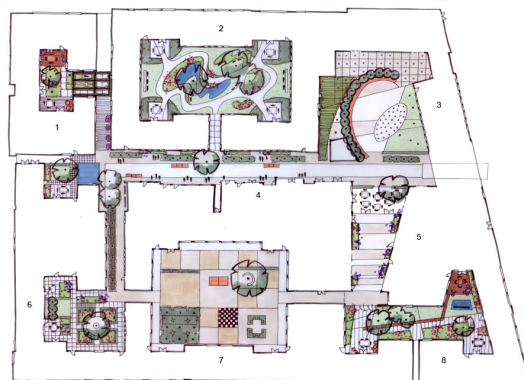


図2. commonspaceのデザイン (施設 website より。designed by Niek Roozen)

住棟に囲まれた中庭 (commonspace) はそれぞれ、homeと関連づけられた異なる性格をもつようにデザインされている。(1) オープンな大通り、(2) 'Vijverpark' (池公園)、(3) 劇場広場、(4) 大通り、(5) 路地、(6) 緑の広場、(7) 'Het Grote Plein' (大きな正方形)、(8) 'Oosthoek' (東部コーナー)



写真5. コミュニティセンターのラウンジ

2層吹き抜けの空間で、ここに向かってクラブハウスやレストラン、スーパーがある。ラウンジにはティースペース、ピアノ、スナックの屋台などが置かれていて日常的な賑わいの場となっている。



写真6. コミュニティセンターの中のスーパー

小さいが、一般の家庭で日常的に使うものが一通り揃ったスーパーマーケット。棚の間隔に余裕があり、カートや職員の助けを借りて本人が自由に品物を選べる。

\*旧オランダ領インドネシアが独立した際に、またそれまでに多くの移民がインドネシアから来ていた。また東インド会社勤務でインドネシアに赴任していた人やその家族など、インドネシア風のライフスタイルがなじみ深い高齢者がいる。最近ではこのライフスタイルの高齢者は少なくなっており、現在はhomeが2つあるが、5年後には解消される見通しである。

#### 参考文献

2) hogeweyk, architecture and interior, <<https://hogeweyk.dementiavillage.com/en/interieur/>>, 参照 2017.10.06

#### ■ライフスタイルによる各 home のコンセプトの設定

23 軒の home には、それぞれの「ライフスタイル」が設定されている。入居者は、入居申し込みの際に過去の生活歴や職業歴、居住歴、食事・趣味活動などの嗜好や興味などを尋ねるアンケートに答える（ほとんどの場合、家族が本人に替わって答える）。この組み合わせをもとに、ライフスタイル研究を行うコンサルタントとの協働によって現在のオランダの高齢者の住まい方として典型的である以下7つのライフスタイルが開発・設定された；伝統的職人風、都市的、上流階級風、芸術・文化的、クリスチャン、インドネシア風\*、家庭的<sup>2)</sup>。このライフスタイルに合わせて、home のインテリアや食事、起床・就寝時刻などの生活リズム、home と外部の関係などが設計されている。それまでに接点のない他人との円滑な



写真7. コミュニティセンター内のレストラン（カウンター）  
認知症の人にとって理解しやすい環境であることを重視しており、それぞれの場が「いかにもそれらしい」雰囲気であるよう、空間の大きさやインテリア、職員の振る舞いにも気を配る。



写真8. コミュニティセンター内のレストラン（奥）  
レストランの外側には commonspace が見え、落ち着いた雰囲気ながら自然光が入り外部空間への連続性を感じられる空間構成となっている。



写真9. 2人乗り自転車  
入居者が必要に応じて職員の支援を受けながら自由に外出できるように、2人乗りの自転車が多数導入されている（オランダでは自転車文化が根付いている）。実際に利用率も高い。



写真10. コミュニティセンター内のパブ  
オランダの典型的なパブの空間を再現。入居者は環境の助けを借りて「自分がどこにいるか、なにをするか（カウンターで注文するなど）」を理解し、職員は入居者が楽しむことを助ける。

共同生活には、共有できる話題やライフスタイルが類似している入居者同士のグルーピングは非常に有効である。

多くの場合、それぞれに入居希望者は2つか3つのライフスタイルが該当し、そのなかから家族との相談によって最も相応しいライフスタイルが選ばれる。入居希望の待機者リストもこのライフスタイルごとにつくられており、ある home に空きが出ると、そのライフスタイルの待機者リストの最も必要度が高い人に入居の順がまわる。

なお、入居者の認知症の進行によって支援の必要度などが変わることがあってもライフスタイルは変化しないため、認知症の進行を理由にして入居後に home を移動することはない。ただし、入居者同士の喧嘩などのトラブルなどによって home の変更がなされたケースはある。また、入居者のライフスタイルやその構成比は社会の変



写真 11. コミュニティセンター内の手仕事クラブ室  
社会的接触の機会を重視しており、オランダではクラブ活動に参加することが一般的であることから、複数のクラブとその拠点が設けられている。ここはコミュニティセンターにある、ベーキングや絵画、手芸などの手仕事クラブ室（写真はスタッフミーティング）

①配管工や大工など、職人気質の人のための住宅。仕事に誇りを持ち、しばしば仕事の内容が話題になる。インテリアは家庭的で居心地が良い、堅実で伝統的な雰囲気。食生活では、入居者が調理を手伝う機会があり、伝統的なオランダ料理が供される。また、昔ながらのアップルパイやケーキが毎週焼かれる。

②宗教を中心に置き、祈りや宗教的な音楽を聞くことが中心的な役割を果たす。入居者は自己抑制的な生活を好み、多くは定期的に教会に通う、または訪問を受ける。食生活ではシンプルなオランダ料理が供され、ティータイムにはビスケットやチョコレートをつまみながら過ごす専用の部屋があることが特徴的。

③アート、文化、文学を重視する。入居者は本や新聞を読み、劇場、映画、博物館、コンサートに出かける習慣をもつ。平等と尊重が重視される。魚、果物、米、ベジタリアン料理などに特徴をもつ朝食と夕食をゆったりと楽しむがランチはシンプル。ワインはレストランで提供される。

④上流階級のスタイル。正しいエチケットを高く評価し、定期的にクラシックコンサートが行われる。食事は社会的なイベントの一種であり、フランス料理などの共同ブランチやハイティー、食堂での食事を楽しむ。外観やインテリアは古典的で上品な雰囲気デザインされた。

⑤主婦であったなど、家族の世話や家事を好む入居者が集まる。洗濯や料理の下ごしらえに誰もが参加でき、家庭的で温かみのある雰囲気が入居者にとって心地よい。昔ながらのゲームが定期的に行われる。ジャガイモ、肉、新鮮な野菜でつくられる伝統的なオランダ料理が好まれ、誕生日はコーヒーとケーキでみんなで祝う。

⑥伝統や思い出、自他への敬意を尊重する。入居者はビデオや写真、音楽、お香などインドネシアの記憶を喚起する要素を共有し、一緒に Pasar Malam（アジア市場）やインドネシア出身者のクラブに出かける。一緒に食事をするのが重視され、1日に2回の温かい食事をする。主にインドネシア料理、古典的なオランダ料理が提供される。

⑦都市的な生活では、社会的、外来的、そして他者との関係性を好むことが特徴的である。社会的相互作用はオープンかつ直接的であり、活気ある雰囲気のなかで入居者は幸福と悲しみを共有する。動物園や遊園地、劇場、プールへの外出が定期的催される。自宅でゲームを

したりして過ごす入居者もいる。午後にはチーズとソーセージなどをつまみ、他の入居者と一緒の夕食を楽しむ。ほとんどの食事はジャガイモ、肉、野菜である。



①職人／伝統的



②クリスチャン



③文化的



④上流階級



⑤家庭的



⑥インドネシア風



⑦都市的な

写真 12. 各 home のインテリアイメージ（施設 website より）

それぞれの home のインテリアは「それらしい」雰囲気でまとめられている。なお、予算は同一。



写真 13. 中庭「大きな正方形」とテラス

「都会的な」ライフスタイルの1・2階合計8つのhomeに囲まれた中庭。オープンな雰囲気、入居者やスタッフ、家族の憩いの場になっている。2階のhomeにはこの中庭に開かれたテラスがあり、広場の雰囲気を近しく共有できる。



写真 14. 奥の中庭

「裕福な」ライフスタイルの人々が好む、静かで落ち着きがありhome外の他者との積極的交流がない、閉じられた空間として設計されている。



写真 15. 住棟の間の路地

互いの雰囲気が伝わる間隔の路地には樹木が植えられており、緩衝の領域にもなっている。

化に応じて移り変わっていくため、10年に一度程度は見直しが必要だろうと感じている。そして実際に現在、ライフスタイルの構成の変更を検討している段階である。

### ■考察 — 「認知症高齢者村」という概念について

「住み慣れた地域で、最期まで」。そのコンセプトの元で地域包括ケアの整備を進めている日本での状況に鑑みれば、認知症の人をその人の住み慣れた環境から引き離して集め、集約的にケアをするというこの施設のコンセプトには一見、違和感がある。しかし、ケアニーズの密度と選択性の関係からは、「集まって住む」ことがもたらす効果は大きい。例えば日本のグループホームの規模では、職員配置の関係もあって「家からまちに自由に外出し買い物などを楽しむ」ことは多くの場合不可能であり、敷地のなかまでは自由に外出できたとしても実際の行動可能範囲は狭い。ケアニーズの密度の関係上、例えば古民家風と現代住宅風の建築とそれに対応したライフスタイル、などの複数の選択肢から自分に合うものを選んで入居することも難しい。非常に優れた事例でも、しばしば「その地域で一般的／典型的」な一つの住生活基盤にする。つまり、必ずしも多様性は担保されていない。

認知症によってそれが具体的にはなにかが理解できなくなった状態で周囲との軋轢や自己否定感・不安感もちながら「本物」の場所と、ある意味記号的に解釈・整理されたわかりやすさが提供される「それらしい」場所と、どちらが良いのか。環境心理学の立場は、「それが客観的にどうであるか」ではなく「主観的にどのように見えるか」こそが人々の認知の対象であり、その行動を決定づけると説明する。そのとき、「住み慣れた地域」とは「客観的事実」か、「主観的真実」のいずれとして解釈すべきか、という疑問が立ち現れる。

「重度の認知症をもち、自他への暴力行為などの本人にとって困難な周辺症状が生じている高齢者が幸福に地域に住み続けるには、地域の人全てが“認知症介護のプロ”相当の技量や知識をもって対応ができる社会が必要です。それは可能なことでしょうか？」。この施設の立ち上げ人の1人で、理事でもあるMs. Yvonne van Amerongenはそう問いかける。認知症高齢者が幸福のうちに最期にひとときを過ごすために、「いま」可能な、具体的な方法と環境が必要であり、これは一つの解なのです、と。